バンダアチェにおける津波被災体験のインタビュー調査

The interview research in Banda Aceh,

林 能成 [1]; 安藤 雅孝 [2]; ディディック ディディック [3]; 藤田 哲也 [4]
Yoshinari Hayashi[1]; Masataka Ando[2]; Didik Didik[3]; Tetsuya Fujita[4]

[1] 名大・地震火山センター; [2] 名大・地震火山センター; [3] シャクアラ大学; [4] 日本画家
[1] RSVD, Nagoya Univ.; [2] RCSV, Science, Nagoya Univ.; [3] Syiah Kuala Univ.; [4] Artist

http://dmo.seis.nagoya-u.ac.jp/

２００４年に発生したスマトラ沖巨大地震・津波では、２２万人をこえる犠牲者が出た。その死者のほとんどは津波によるものであり、あらためて津波の脅威が世界を震撼させた。津波を原因とする大量死は１８９６年の明治三陸津波をはじめ、これまでにも世界中で繰り返し発生している。だが、その実態は必ずしも理解されていなかった。これは、死者数といった統計的な数値のみを伝えられても、人々が津波の実態を想像することが難しかったことも一因と考えられる。被災プロセスを具体的に知らせる映像資料が津波防災教育には欠かせない。

今回の津波ではインドネシア・タイ・スリランカといった被災国において、海岸から浸入してくる津波の様子をビデオカメラが克明に記録し、多くの人の津波に対する理解を一変させることとなった。更に津波前後の衛星写真がすみやかに公開され、津波によって壊滅した集落の様子や、激しく侵食された海岸線といった被災の様子も世界中の人が災害発生直後に知ることになった。

だが、これらの映像が津波災害の全てを記録しているわけではない。例えばインドネシア・バンダアチェで撮影され、テレビなどで繰り返し放映されていたモスクの塀の上からの映像は、海岸線から４ｋｍ近く内陸に入った場所で撮影されたものである。それゆえ映像として残された津波は海岸線付近のものに較べ、高さ・流速などが相当に減衰したものであったと考えられる。つまり、最も苛烈な津波の記録は、ビデオ映像としては残されていない。　海岸付近にいた人の多くは津波にのみこまれ亡くなっているが、中には幸運にも生き残ることができた人がいる。その人たちの証言が、これまでの調査や新聞報道などを通じて伝えられている。我々は、このような「人の記憶」としてのみ残された津波像を記録し、その様子をわかりやすい形で後世に残す必要があると考えた。そこで２００６年１１月に、スマトラ島・バンダアチェにおいて、「津波に遭遇し、いかにして生き延びたか」という点に焦点をしぼったインタビュー調査を実施した。

調査は名古屋大学と学部間協定を結んでいるシャクアラ大学と協力して進めており、同大学理学部の学生に通訳をお願いした。インタビューは、我々が英語で質問し通訳の学生がアチェ語で被災者に聞いて回答を得て、その内容を我々が英語で理解するという態勢で行った。今回の調査では２２人の被災者にインタビューして、地震発生から津波に遭遇し、いかにして生き延びることができたかといったことを聞いている。特に、地震発生から津波遭遇までは、時間的な経緯や、津波の規模などについてなるべく定量的な回答が得られるよう、質問項目を注意して設定した。

発表では、これら調査から明らかになった、震源近傍での津波の挙動と、様々な場所で津波に遭遇した人々がいかにして生き延びることができたかを紹介し、そこから得られた教訓を読み解く。